

【特別展】  
**生命大躍進**  
脊椎動物のたどった道

2016年1月16日(土) - 4月3日(日)  
月曜日休館(2月1日、3月7日、21日は開館し翌日休館)  
主催:愛媛県、NHK松山放送局、NHKプラネット四国、愛媛新聞社



人類の誕生よりもはるか昔の世界というのは、多くの人々の興味をかきたてることでしょう。古生物の図鑑をながめるのが好きな子どもたちは少なくないに相違ありません。今や子どもだけではなく大人にも愛されている名作漫画「ドラえもん」に、恐竜をはじめとする古生物たちがたびたび登場するのを見て、多くの人々にとって何億年も前の大昔の動物の姿は意外に身近に感じられるのではないかと思います。

このたび当館では、地球上に生命が誕生してから今日までの約40億年の歴史を明らかにする空前の展覧会「生命大躍進」を開催します。

海中に生じた様々な生命がそれぞれに繁栄や絶滅を繰り返してゆく中で、やがて眼を持つものが登場し、陸上で生活できるものも現れ、さらには胎盤や乳腺を獲得した哺乳類が親子の慈愛を持つようになって、人類が生まれてくるまでの壮大な歴史。このような進

化はどのように達成されたのか。謎を解く鍵はDNAに刻印されています。最新のDNA研究によって判明してきた生命の進化における驚くべき飛躍の歴史を、「パージェス頁岩」をはじめとする多数の貴重な化石のほか、精巧な復元標本や、NHKならではの技術力による高精細の映像等によって展望するのがこの展覧会です。

古生物の図鑑を愛読する子どもたちはもちろんのこと、かつて図鑑や漫画や映画で古生物に親しんだことのある大人たちにとっても、新鮮な驚きに満ちた内容になっているはず。全国5会場を巡回する展覧会ですが、四国・九州地方では当館が唯一の開催地となります。日本に初上陸したロイヤル・オンタリオ博物館蔵の「ピカイア」や「アノマロカリス」等の本物の化石を、是非この機会に御覧ください。(梶岡)

「日本が愛した印象派  
モネからルノワールへ」展への  
所蔵品出展に寄せて

ボニ市のドイツ連邦共和国美術展示館で2015年10月8日から2016年2月21日まで開催中の標記展覧会へ、当館のコロー「ヴィル＝ダヴレー 白樺のある池」、モネ「アンティープ岬」、セザンヌ「水の反映」を出展しています。同展は、日本の蒐集家と洋画家による印象派を中心とした西洋近代絵画受容の歴史を紐解くもので、19世紀欧州におけるジャポニズムの興隆や、ドイツ人美術史家の著作が日本人の西洋近代絵画理解を促進したこと等にも着眼しながら、東西交流の文化的所産を詳らかにしています。

同展図録(英語版)の68-69頁を開くと、左に溪斎英泉「木曾街道六拾九次之内板鼻」(クロード・モネ財団蔵)(註1)、右にモネ「アンティープ岬」の図版が掲載されています。この割付は、同書42頁でペアーテ・マルクス＝ハンセン博士が、前景を斜めに横切る松について、両作品間の影響関係を指摘しているからでしょう。

当館所蔵品と同じ主題、構図の異作をモネは他にも描いているのですが、これらと浮世絵の関係については様々な先行研究が存在します。筆者も、モネは浮世絵に頻出する、前景の景物と後景を極端に対比させて画面に臨場感を与える構図(註2)を意識していたのではないかと考えています。今回の貸出を機に、作品解釈が又一つ蓄積されたことを喜ばしく思います。(武田)

註1) 同書には作者名が「歌川広重」と記されていますが、この連作は厳密に言うところでは英泉によるもので、「板鼻」は英泉作。

註2) 例えば、葛飾北斎「雷獄三十六景 信州諏訪湖」や歌川広重「東海道五十三次之内 赤坂」(紅英堂版)等。



クロード・モネ「アンティープ岬」1868年



ジャン＝バティスト＝カミーユ・コロー「ヴィル＝ダヴレー 白樺のある池」1855-1860年頃



ポール・セザンヌ「水の反映」1888-1890年頃

THE MUSEUM OF ART E.H.I.M.E. 愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内  
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511  
http://www.ehime-art.jp



愛媛県イメージアップキャラクター みぎやん

ハトの声  
編集後記



講座&アトリ工展、開館記念イベントが終わり、来年のことを考えなければならない頃となりました。今年の6月からは、南館の耐震工事が始まる予定で、そのためアトリエも閉室となります。創作活動を新館や館外に移し、対応できることを目下検討中です!

Canforo  
カンフォロとは?  
イタリア語で「くすのき」を意味します。  
愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでなづけられました。

愛媛県美術館ニュースNo.51 2016  
発行日=平成28年1月10日  
編集・発行=愛媛県美術館  
執筆者=王井日出夫、大野 晴秀、稲田 哲也、梶岡 秀一、長井 健、武田 信孝、杉山 はるか、八木 誠一、田代 亜矢子、野口 理佳、石崎 三佳子

2016年  
**1月23日(土) - 3月27日(日)**  
黄金のファラオと  
大ピラミッド展  
国立カイロ博物館所蔵



(アメンエムオベト王の黄金のマスク)第3中間期 第21王朝 国立カイロ博物館所蔵

およそ4,500年前、古代エジプトの古王国時代(紀元前2586~2185年)に、クフ王、カフラー王、メンカウラー王の3代のファラオたちが建造した巨大なピラミッド群は、古代ギリシア時代から伝わる「世界の七不思議」の中でも第一の不思議として知られ、現代でも世界遺産に登録されるなど、いつの時代も訪れる人々を魅了してきた巨大な建造物です。しかし、ピラミッドは、いつ、どんな人が、何のために、どのように造ったのか? 建造したファラオとはどんな人物だったのか? ピラミッド時代以降、ファラオたちは何を創ったのか? —これらは未だ大きな謎に包まれています。

本展は、世界一のエジプト・コレクションを誇る国立カイロ博物館所蔵の膨大な収蔵品の中から選りすぐった100点あまりを展示するとともに、多くの謎を解明するため、映像展示も駆使して、古代エジプトの世界をダイナミックに紹介します。昨年秋東京にて開催された後、全国巡回のトップを切って愛媛の地での公開となるもので、中四国では当館が唯一の開催となります。

同博物館が所蔵する3大黄金マスクの一つ「アメンエムオベト王の黄金のマスク」が21年ぶりに来日、愛媛では初めて公開されるほか、特に保存状態が良く美しい「アメンエムペルムウトの彩色木棺」など、現在渡航困難なエジプトから第一級のコレクションが来日する貴重な機会です。また、ツタンカーメン王の黄金のマスク、荘厳なルクソール神殿、華麗なカルナク神殿などを撮影した高精細4Kシアターも必見です。

数々の至宝を通して、ファラオや王家の女性、貴族の活躍、ピラミッド建設を支えた人々の暮らしなどに思いをはせていただき、ナイル川流域に3000年にわたって花開いた古代文明、そしてピラミッド建設をめぐる壮大な歴史のドラマを楽しんでいただければ幸いです。(長井)

つぶやき



昨年の遍路展終了間近の10月下旬より、突然遍路巡礼に目覚め、自家用車で回りました。あらゆる場面で遍路を公言し諸先輩より情報を集め、別格を含め108ヶ寺+高野山を、燃えに燃えて実質17日(4か月半)で回り切りました!(田代)

つぶやき



11月22日より「人 そのイメージと表現」というテーマで今年度5回目の所蔵品展が始まりました。作品に表現された「人」の姿は多様で、興味は尽きません。時には一枚の絵の前で静かな時間を過ごすのはいかがでしょうか。(稲田)

# 阿部里雪 COLLECTION

## コレクション

子規山脈という言葉があります。松山出身の俳人、正岡子規の周囲に集った大勢の師友たちの、それぞれに存在感を誇示する多様な個性が豊かに連なっている様子を、山脈にたとえているわけです。そのような子規門下の人々について詳しく知ることのできる極めて興味深い書物が、『子規門下の人々』です。

著者は、柳原極堂や五百木瓢亭の下で新聞記者として活動した俳人、阿部里雪。明治26年、伯方島に生まれ、松山に出て、柳堂の『伊予日日新聞』で記者をつとめる中で高浜虚子や河東碧梧桐をはじめ多くの俳人と身近に接し、かわいがられ、信頼されました。東京に出て、瓢亭主宰の雑誌『日本及び日本人』の記者として活動したあと、昭和16年、伯方島へ帰郷。地域の文化のために尽力しながら句作に励み、昭和48年に逝去しました。

里雪の『子規門下の人々』には虚子の手紙や、子規門下の画家である下村為山の書画をはじめ多くの文人墨客の遺作が引用され、それらが里雪の所蔵であることは関係者には知られていましたが、全貌は把握されていませんでした。

このたび当館ではその里雪遺愛のコレクションを一括してお預かりいたしました。本年度の夏7月、今まで知られていなかった子規の俳句「湯の町の…」を書いた子規自筆の短冊が発見されたことは新聞やテレビで報じられましたが、それが



下村為山(子規庵句会写生図)、個人蔵

このコレクションの一つです。昨年度の「柳瀬正夢展」で御覧いただいたことのある新発見の柳瀬の書画もこれに含まれます。虚子の手紙2通は、近代俳句の歴史を研究するうえで不可欠の史料です。為山をはじめ、塩月桃甫、坂田虎一、四田観水、村上鳳湖、矢野翠堂のような愛媛ゆかりの画家たちの作品が多く遺されているのも注目に値します。特に長谷川竹友に関しては掛軸や短冊のほか絵付をした陶器までもあって、里雪との間に親密な交友があったことを伝えています。愛媛の美術が、いかに俳句に近しかったのかをあらためて感じさせます。俳句を核とした愛媛の文化の特質を考えるための第一級の史料群であり、松山市立子規記念博物館をはじめ関係機関と連携しながら今後じっくり研究してまいりたいと思います。(梶岡)

## 公開承認施設

通常、作品の所有者以外の者が指定文化財(国宝、重要文化財)を公開するためには、文化財保護法により、事前に文化庁長官の許可を受けなければなりません。申請には、展示環境や防犯防災体制などについての何種類もの書類を揃えて提出しなければならず、かなり煩雑なのですが、裏を返せば、特に脆弱な素材で出来ている日本の指定文化財は劣化や破損の恐れが常につきまとうので、厳しい条件をクリアした施設でないと、安全性が保証されないということです。

当館の企画展でも、時々指定文化財が展示されているのをご覧になったことがある方も多いと思いますが、当館は「公開承認施設」といって、常に安全に指定文化財を展示できる環境が整っていることをあらかじめ文化庁から認められている施設です。この場合、事前の申請は不要で、事後の報告のみで良いことになっています。

ただし承認されるには、温湿度環境や防犯防災体制の他にも、文化財の扱いに習熟した学芸員が2名以上いるか、過去5年間に3回以上指定品公開の実績があるか…等、いくつもの条件をクリアしなければなりません。新館内では全面的に「飲食禁止」にさせていただいているのも、この一環です。しかも一度承認されたら永久に続くのではなく、5年間という期限付き。その間に上記の条件を再びクリアできなければ、更新はできないという厳しいものです。平成27年11月現在、全国で114施設が承認されており、愛媛県内では当館だけとなっています。(長井)



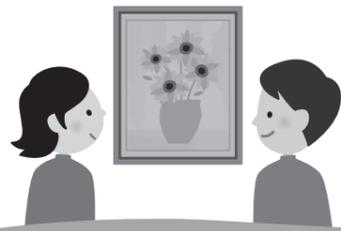
## 愛媛県美術館 de 愛イベント 開催報告

美術館では、10月17日、全国的にも珍しい美術館職員の企画・運営による「結婚支援イベント」を開催し、県内の25～40歳の男女20人ずつが絵画鑑賞などを通して新たな出会いや交流を深めて頂きました。

取り組みに至った理由は、美術館の有効資源である「学芸員と絵画作品」「展示室・講堂・堀之内展望ロビー等施設」「堀之内公園・松山城・恋人の聖地」二之丸史跡庭園の借景を活かした新たな美術館ファンづくりや、地域産業との連携により地域活性化に貢献することでありました。

学芸員による「対話型鑑賞法」を体験後、受付時に同じ絵カードを選んだ男女が絵を飾ってある常設展示室で絵画鑑賞し、会話のきっかけにしたことは「美術館らしい」と好評でありました。また懇親会では、県酒造協同組合の統一ブランドの日本酒「mar(マール)」や、えひめ愛フード推進機構の縁むすびスイーツ「道後ロール」が振る舞われ、楽しい会話に彩りを添えていました。

イベント終了後、参加者を見送る中で「美術館は初めて来たが楽しかった。また来ます。」「カップルが成立したのでデートに来ます。」との言葉を頂きました。二人の出会いは美術館。参加者の皆さんが、今回のイベントを通じて「美術館を思い出の場所」にしてもらえればと期待しています。(大野)



## 芸術教育の新たな展開 — コミュニケーション能力の育成 —



11月22日(日)の開館記念イベントで、玉井日出夫名誉館長の特別講演会を開催しました。その概要について名誉館長に執筆いただいたので、紹介します。

現代社会は、知識基盤社会であり、知識や創造力が主役になる時代です。

このような経済社会では、その原動力として人間の感性や創造性が求められています。また、少子化や都市化、情報化など社会環境の大きな変化は、子どもの心の発達に深刻な影響を与えており、感性を育む教育の重要性が指摘されています。

このため芸術教育が重要になっていますが、特に、いじめなど今日的な問題の背景には、子どもたちのコミュニケーション能力の不足や低下が指摘されており、かなりの学校で、芸術を体験する活動を通じて、コミュニケーション能力を育む教育の実践が始まっています。芸術そのものを教える教育(Arts Education)から、芸術の特質を活かした教育活動(Arts In Education)へと芸術教育の新たな展開が始まっているのです。

愛媛県美術館では、これまで対話型鑑賞教育を取り入れながら、感性を育む教育に力を入れてきましたが、本年度から、文化庁の補助事業として、感性教育のさらなる充実に取り組んでいます。すなわち、小学校や中学校と協力しながら、アートによる感性教育のための新たなカリキュラムの開発に取り組んでいるのです。いずれ、愛媛方式と呼ばれ評価されるようなカリキュラムの開発と教育実践が実現することを期待しています。(玉井)

## 普及レポート

### 連続講座 メディウム版画

美術館では、県民の方々に様々な創作活動に取り組んでいただき、美術への関心を高めてもらうため、各種講座を開いています。9月19日(土)・20日(日)には、連続講座「メディウム版画に挑戦」を開催しました。

メディウム版画は、プレス機を用いなくて凹版画の制作ができるという技法で、この新しい技法に興味をもっていただいた方々9名で制作しました。一日目は、下絵を描き、ポリシートにニードルで彫っていき、彫りが完成した人から試刷りを行いました。黒の版画インクを詰めた後にメディウムを塗り、版画紙を貼り付け、乾燥させたあとに紙を剥がします。メディウムが接着剤となってインクを紙にはがし取るという新発想の技法に、驚きの声があがりました。二日目は、着色の仕方を学び、作品を完成させます。試刷り作品で確認しながら彫りを加え、インクを詰めてメディウムを塗った後に、アクリル絵の具やクレヨンで着色をして刷り上げます。メディウムの塗り方にもコツがあり、先に進んでいる方が他の参加者にアドバイスをするなど、参加者同士で交流を深めながら、制作を楽しまれていました。(野口)



## 第6回 美術館講座 & アトリエ展を開催しましたあ〜♪

◆ 会期: 11月21日(土)~26日(木) ◆ 会場: 新館2F 特別展示室

開館以来、3年に一度を目途に開催してきた講座&アトリエ展も今年で6回目。当館の教育普及活動の全容を知っていただきたいと実施しています。講座やアトリエの参加者に出品を募り、24年以降に制作した力作約100点が集まりました。

作品展示に併せ、講座やアトリエをパネルにまとめ、画像をモニターで流し、懐かしい写真の数々に足を止めてくれる方々も。教育普及に力を入れ始めて丸17年、様々な活動を重ね、PRもしているつもりなのですが…、来場者の中には「美術館がこんな活動しているのを知らなかった。」との声もあり、悲しさと更なる意気込みをいただきました。興味を持たれた方々から、早速にアトリエ教室の予約を頂戴し、新たなファンも開拓できました♪

また、体験コーナーとして、アトリエひろばから「ブロック」と「楽器」を会場内に設置。ここは、実際に手に取って音を出したり、組み立てたりして遊んでもらいました。日々、ロボットが登場したり、街並みを想像したりと、形が変わっていくのを私たちも楽しみました。そして、当館が力を入れている「対話型鑑賞法」も会場内で毎日開催。展示室の白壁に大きくスライドで写した作品を居合わせた方々とじっくり時間をかけてみていくと、色んな感想や意

見を聞くことができ、作品への新たな興味を引き出してもらえました。

実際のアトリエ利用者の口から、「美術館もいろんなことしよんな。」との声も、興味のあるところは目に付けど、それ以外は案外認識されていないんですね。だけど、そうなんです！美術館では様々な方向から美術を考えていただけるように日夜努力中。どうぞ、気にとまった講座や活動に参加してみてください！(田代)

